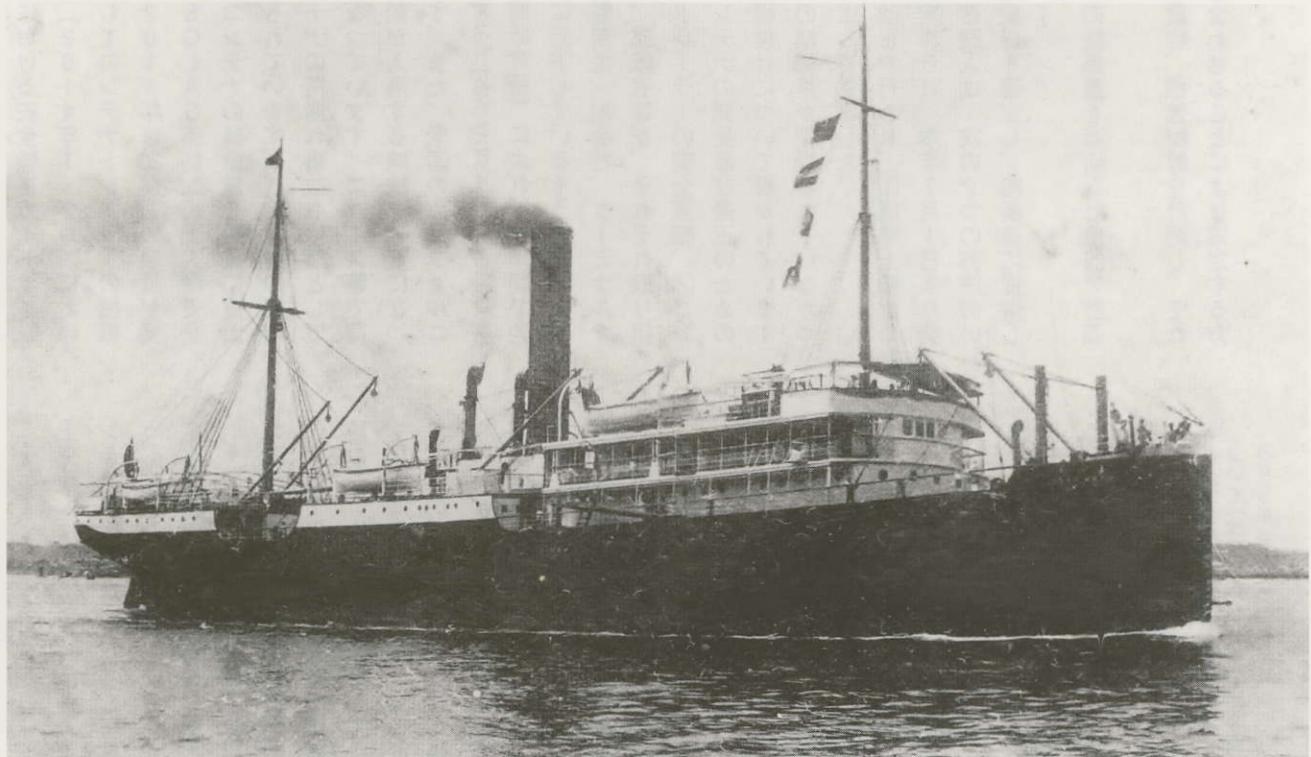


# 熱帯海域の定期船から 小笠原航路の定期船へ

文・山田廸生（日本海事史学会副会長）



緒明圭造（『緒明圭造翁を偲ぶ』より）



嘉代丸（筆者所蔵）

## 嘉代丸

《主要目》 貨客船。鋼製。緒明合資会社（横浜）所有。総トン数2,113トン。垂線間長78.8メートル、型幅11.6メートル。主機3連成汽機、出力（公称馬力）206NHP。英オーシャンS.S.社（Ocean Steam Ship Co.）と西豪州汽船会社（West Australian S.N.Co.）共有のサルタンSultanとして明治27年（1894）英ワークマン・クラーク社（Workman Klark & Co., Belfast）で竣工。同42年（1909）緒明圭造が購入し嘉代丸と改名。大正11年（1922）山本佐次郎（神戸）に売却。同13年（1924）張作霖の東北軍閥の手に渡り、宮口で軍艦に改造。のち解体。

## 緒明圭造の小笠原航路に就航

戦前的小笠原航路は、明治9年（1876）の三菱会社による開設以来、大正初期までは日本郵船、それ以後は近海郵船が運航してきた。つまり、郵船系の航路であった。

中断期があった。第1次大戦中の大正4年（1915）3月から7年5月までの3年間である。大戦中の船不足が背景にあった。

困ったのは島民だ。人口は5千人を超えており、主食（米麦）の移入と砂糖の積み出しができないと、生活が立ち行かなくなる。

窮地を救つたのは資産家緒明圭造である。

「嘉代丸」を投入。国と東京府から年1万8千余円の補助を受け、郵船に代わって年18回の小笠原定期をおこなった。助成期間は1年間だったが、運航は3年間続けられた。

緒明圭造は慶應3年（1867）伊豆湯ヶ島の生まれ。品川お台場にあつた緒明造船所の創業者緒明菊三郎のもとで腕を磨き、造船業から海運業への事業転換を提案した。のち菊三郎の娘婿となり、事業（おもに海運業）と資産を相続した。ちなみに、菊三郎は伊豆戸田村の船大工嘉吉の息子である。ロシア船員による洋式帆船「ヘダ」の建造に従事した父を手伝い、洋式船の造船技術を学んだ。

「嘉代丸」の前身は英國船「サルタンSelatan」である。明治27年（1894）英ベルファース

トのワークマン・クラーク社で竣工。英ブルタヴィア・フアンネル・ラインのシンガポール・バルの海運人アルフレッド・ホルトが元治2年（1865）に創設したオーシャン・スチームシップ社を始まりとする。当初から汽船を投入、英國と東アジアを結ぶ植民地航路を経営してきた。煙突が青色なのでブルー・ファンネル・ラインと称した。シンガポール・フリーマントル（西豪州）航路は、東アジア航路の支線として設けられたものである。

創業当時、世界の遠洋航路は快速帆船（クリッパー）の全盛時代であり、汽船がこれに対抗するのは難しかった。が、同社は2連成汽機を装備した鉄製汽船を使用して、これを駆逐していく。とくに東アジア航路のばかり、明治2年（1869）のスエズ運河開通による航路短縮が汽船に有利に働いた。

同船は当時、華人に売却手続中であった。艦装工事の目的が東北軍（奉天派）の軍艦への改装であったため、認可行為についての訓電を本省に求めたのだ。いうまでもなく、東北軍の総帥は張作霖と息子張學良である。

結局、同船は華人の手に渡り東北軍の軍艦になつた。葫蘆島航警学校の練習艦「威海」がそれらしいが、筆者は確証を得ていらない。中国の海軍史書にも同船の関連記事があるようだが、筆者の経験上、この国の近現代対象の海事研究は信じがたいものがある。

国東北部）・華北間を結んだ。小笠原航路当時は、横浜が発着港だった。八丈島に寄港し、父島と母島まで往復した。さらに年2回青ヶ島に寄港。年6回硫黄島へ延航した。

小笠原航路から撤退後は、チャーターボー

として日本・青島間を往復。大正11年（192

2）神戸の山本佐次郎に売却された。同じ海域で稼働していたようだ。以後の船歴は不明であるが、外務省外交史料館のネット公開資料に、晩年の動静を伝える記録があつた。

大正13年（1924）10月25日付のその資

料は、牛莊（ニューチャン）（營口）の中山領事が本省に訓令

を仰いだもの。神戸から旅順経由で牛莊に入港した「嘉代丸」の船長が、牛莊での艦装工事にともない、不要になる乗組員減員の認可を領事に求めた公文書である（「船舶職員施行規則」第7条による認可申請）。

同船は当時、華人に売却手続中であつた。艦装工事の目的が東北軍（奉天派）の軍艦への改装であったため、認可行為についての訓電を本省に求めたのだ。いうまでもなく、東北軍の総帥は張作霖と息子張學良である。結局、同船は華人の手に渡り東北軍の軍艦になつた。葫蘆島航警学校の練習艦「威海」がそれらしいが、筆者は確証を得ていらない。中国の海軍史書にも同船の関連記事があるようだが、筆者の経験上、この国の近現代対象の海事研究は信じがたいものがある。

## 張作霖の海軍で生涯を終える

この船の姿は変わっている。前方に配置した船橋甲板室が異様に大きい。頭でつかちな外形は静穏な熱帯海域にふさわしく、小笠原航路に向いていなかつたと思われる。

緒明圭造が購入したのは明治42年（1909）である。「嘉代丸」の船名は三女嘉代子